

【件名】 [DHM046]人文情報学月報【後編】 「博物館資料と情報」 (亀田堯宙) ほか

2011-08-27 創刊

ISSN 2189-1621

人文情報学月報

Digital Humanities Monthly

2015-05-27 発行 No.046 第46号【後編】 567部発行

◇ 目次 ◇

【前編】

- ◇ 《巻頭言》 「博物館資料と情報」
(亀田堯宙：京都大学地域研究統合情報センター)
- ◇ 《連載》 「西洋史 DH の動向とレビュー
～西洋史学はウェブ情報をどのように位置づけているのか～
『研究入門』を題材に」
(菊池信彦：国立国会図書館関西館)
- ◇ 《連載》 「Digital Japanology 寸見」 第2回
「ADEAC のアーカイブ追加
：日本文化研究で小規模デジタル・アーカイブズをどう使うか」
(岡田一祐：北海道大学大学院文学研究科専門研究員)

【後編】

- ◇ 人文情報学イベントカレンダー
- ◇ イベントレポート (1)
ミシガン大学「デジタル人文学と日本研究の未来：シンポジウム・研修
Digital Humanities and the Future: a symposium and workshop」
(横田カーター啓子：ミシガン大学大学院図書館 日本研究専門司書)
- ◇ イベントレポート (2)
「AAG 2015 Annual Meeting 参加報告」
(瀬戸寿一：東京大学空間情報科学研究センター)

◇イベントレポート (3)

「TOKYO 2020/2030ー文化資源で東京が変わる」第1回東京文化資源区シンポジウム
(鈴木親彦：東京大学大学院人文社会系研究科 博士課程 (文化資源学))

◇奥付

◇イベントレポート (1)

ミシガン大学「デジタル人文学と日本研究の未来：シンポジウム・研修

Digital Humanities and the Future: a symposium and workshop」

(2015年3月14日・15日開催)

： <http://www.i.umich.edu/cjs/eventsprograms/ci.digitalhumanitiesandthefut...>

(横田カーター啓子：ミシガン大学大学院図書館 日本研究専門司書)

このシンポジウムと研修については既に講師の一人である橋本雄太氏の報告 (DHM044) [1] があるが、それに加えて海外の日本研究 DH 現状紹介としてミシガン大学主催側から企画経緯を含む報告をしたい。

デジタル人文学はミシガン大学においては主に英米文学、メディア文化研究など英語による研究が主流で、社会科学や生命情報科学も含む全学でのデジタル学術研究を統合し情報を発信するようなセンターは存在しない。2013年1月にデジタルアーカイブ学の世界の権威であるミシガン大学情報学大学院の Paul Conway 教授がロンドン大学での研究から同学に戻られたのをきっかけに、情報学大学院生が中心となり研究者・司書を含む会合が催された [2]。ちょうどその頃、日本政治学研究所の大学院生がデータマイニングが可能な日本語資料について、歴史学専攻の大学院生が IT を自分の中世史研究に生かしたいと相談に来るようになった。また、フランスからのポストドクターが福島原発放射線被害調査地図を作成する市民活動研究に取り組みなど、日本研究では教授達よりもいち早く大学院生達がデジタル研究手法を探り始め、私は彼らに啓発されて「新しい仕事の扉」を開くことになった。

調べてみると人文学の諸学部ではすでに将来の教員採用を視野に入れてデジタル学術研究に取り組む若手研究者を他校から講演シリーズに招いていた。つまり、現在の大学院生はデジタル研究手法を知らなければ将来の就職はかなりの狭き門になる。図書館でも Visualization librarian, Data librarian の新規雇用、テキスト以外に画像やデータ等を保存し洗練された諸機能を持つリポジトリハードウェアの検討、学生向けの GIS, Encoding の研修等、新しい動きが始まっていた。日本研究者と学生のために日本研究に絞ったデジタル人文学のセミナーを開くことは喫緊の課題と感じられた。

研究専門司書の重要な役割は、大学研究・教育の使命達成のために学術情報基盤を整備することである。研究手法の変化は図書館サービスの変化を促す。そこで、私は日本学研究センター所長にセミナー開催を提案した。幸運にもセンター所長である Jonathan Zwicker 准教授（近世・近代文学）も同様の必要性を感じていた。情報学大学院の Paul Conway 教授の協力も得て、図書館・日本学研究センター・情報学大学院の共催として日本研究センター理事会に助成金申請を行うと、デジタル人文学の重要性と共催という多様な分野の協力という点も評価されて無事に承認された。

企画内容にあたっては「海外には二次資料はあるが、一次資料は日本にあり、また海外から利用できる日本語電子資料も乏しい状況にあって、海外におけるデジタル日本研究とは何なのか」という基本点と、デジタル人文学の教育利用をまずじっくり話し合いたいという Zwicker 准教授の強い希望があったため、広く公開せず地元関係者のための会合ということになった。図書館では、今回の日本イベントは「外国語によるグローバルなデジタル地域研究支援を計画する」ことへのきっかけとなり新しい流れを創り出した。

企画はシンポジウム形式になり、開催実現にはデジタル人文学についての勉強や講演者への依頼と日程調整など含めて一年近くかかったが、日本から立命館大学赤間亮教授、東京大学永崎研宣特任准教授、京都大学橋本雄太氏のご協力を得て内容の濃い充実したものとなり、講師の皆様にはあらためて感謝申し上げる。開催日が他の会合と競合したためか肝心の日本研究者と大学院生の参加が低く「笛吹けど踊らず」の感になったのは否めない。米国の研究者、学生は過密スケジュールをこなしている。汎用性のある内容だと宣伝したが、技術とは疎遠な研究者とその指導下にある大学院生や、既にデジタル研究を行っている若手の社会学者の参加がなかったのは、日常的コミュニケーションの欠落と企画の仕方が原因だったのではないかと反省点も多い。

その一方で、少数の日本研究大学院生に加えて、情報学大学院と日本研究以外の学生や多くの図書館関係者が州外からも参加してくれた。Smart-GS の研修には「これを 20 年前から待っていた」と研究者は感謝し拍手が沸き起こった。司書としてはこれからのデジタル学術研究を踏まえての資料収集や基盤整備など多くの知見を得るために、日本の関係者と緊密な交流を続けていくことを強く望んでいる。

参加者一同、講師の方々の学識の深さと香り高い品格にはたいへん感銘を受け鼓舞された。海外では「日本のテクノロジーでなぜ」とデジタル化とアクセスの悪さをよく嘆かれ「遅れた日本」と沈みがちである。しかし、今回の研修では IT が歴史的に深い学問の蓄積と結びつくような洗練された学術研究が可能になるのか、グローバルな協同研究の企画など、大いなる潜在的な可能性を感じ、日本学術文化の底力に触れたような自信さえ得ることができた。多くの参加者達は、浄化されるような爽やかな感動に包まれ勇気付けられた。

多様な可能性があるだけに、デジタル研究の発展には紙の資料による研究にはない協同作業が欠かせない。この点でもこのイベントが研究者・司書・運営スタッフの協同企画作業であったことは重要である。異なる立場の多忙な人々同士、スムーズなコミュニケーションは困難でもあった。日本研究においてはデジタル学術研究に適する電子資料が乏しいため、資料取得そのものが難しい。このイベント趣旨にあるようにデジタル人文学は「研究者、司書、アーカイビストの継続的な会話を提供する知的空間の創造」を目指すものであるが、それ以上に、デジタル学術研究発展には、出版社、ソフトウェア開発者、プラットフォームプロバイダー、法的関係者なども含めたネットワーク構築と協同事業が欠かせない。このイベントはその第一歩になった。デジタル学術研究は「変化、多様性、越境、協同、グローバル」の要素をその性質上持ち、そして、持続的な変化に伴い柔軟に成長することを要求する。これまで以上に日本の各方面関係者にご協力を仰ぎ、グローバルな日本研究を共に深化させ発展させていきたいと心から願っている。

[1] <http://www.dhii.jp/DHM/dhm44-2>

[2] <http://www.dhii.jp/DHM/dhm35-2>

Copyright (C) YOKOTA, Carter Keiko 2015- All Rights Reserved.